

人の一生は重き荷を負ふて遠き道を行くが如し急ぐ可らず

日來て見て居るんなら相續くらぬは出  
来るだらう、一つやつて見ろ、試して  
やるから、小「やつても宜しうございま  
せうか、行「やつて見ると宜い、此方へ  
来い、小「難有う存じます」そこで小僧  
は扇を掲げて、手紙の袖を取つて身  
繕ひする、行「どうあへん越はつて遠慮  
なく振つて来い、手前が刀鍛冶になれ  
るのなれぬか試てやる、遠慮なく一生  
投込め同様に葬つてしまひ、後に残る

▲元祿快舉錄出つ

▲元祿快舉錄出つ  
昔への英雄怪傑傳或は烈女孝子傳等世に行はるゝもの、多きは牽強附會の説になり其の眞を傳ふるものは甚だ難し又又世人の既に墮落し盡くしたるに

理由  
 原告は明治四十一年法律第六

被控訴會社は明治四十一年法律第六  
三號に因り特設せられたる日本法人

選者 九皇節去島

隨意の事、締切期限十二月二十日、  
發表は四十三年一月元旦の本紙上を  
以てす、同好の士蓄て投詠せられん  
ことを希ふ

十一月廿日

て始めて申立てたる新車

の無効を請求す 法律關係の基本たる  
 決の新事實をも申述し明かに總會決議  
 當審に至りて更に第二旨言たる不法事  
 旨言たる不法通知の事實のみを申述べ  
 第一審に於ては訴の原因として第一  
 項と認むるの外なし然らば控訴人は最

うざるものなるが故に之を却下

京城控訴院書記 李善景  
 明治四十二年十二月十日  
 原本に依り此正本を作る

ない衣類を着て、見苦しいは

そつが高慢ちやゝれた小僧だ。彼の餓鬼が又來一居る、ヤイ、其



九年五月前  
同金活  
太師  
社  
邪に  
見ゆる  
へ入るて

日來て見て居るんなら相識くらゐは出  
来るだらう。一つやつて見ろ。試して  
やるから。小「やつても宜しうございませ  
うか。行「今つて見せが宜い。此方へ  
来い。小「體有存じませう。そこで小僧  
は尻を端折つて、手廻の桶を取つて身  
纏ひする。行「ア向ふへ廻はつて遠慮  
なく振つて来い。手廻が刀鎧治になれ  
るのなねか試てやる。海蔵「一平は  
懸命に振つて来い。其内に向て行光  
屹と身振へする。打込に右の小僧が絶  
え執つてカーンと、打込むティーン・タ  
ン・カーン、カン、ティーン／＼カーン  
／＼とホンの響みに出来るか出来ねか  
御頼み申します。

中  
 村  
 耳  
 鼻  
 咽  
 喉  
 眼  
 科  
 院

診察 自午前九時  
 至午後五時  
 每月十五日休業

京城西小門通六番戶  
 入院  
 意隨  
 菅醫院

本町二丁目  
 入院 隨意  
 赤貧者施療

電話改番 一三一五

草煙島

京江廣

商電

話六七五

右は職長として永年勤續仕候處今般合意退店の上同業相  
替み候に付ては弊店同様出格御引立被成下度奉願候敬白  
明治四十二年十二月一日

大 漢 門 前

遠 藤 洋 服 店

告 土谷彦次郎

私儀

遠藤洋服店勤續中各位の御引立を蒙り奉拜謝候今般退店  
左記の所に於て營業仕候就ては格別の御引立相蒙度奉願  
上候也

土谷洋服店

店主 土谷彦次郎

南大門通四丁目天一銀行側南半丁

齒科治療  
ドクトル 本町六丁目  
中村安子  
(数えど横町)

好きなれば樂鐘を燒てさまして頭へ被るこ云ふ人様々の數  
 にもれぬ醉狂者の主人、今日此頃の不景氣に愛想をつかし  
 永年つなぎ止めたるひるきの綱をさらりこ切るこ云ふ韓洋  
 亭を世はいつまでも霜枯れの寂びしき續きにもあらじやが  
 ては花咲く春の來時もあるのをさりとこは口惜しと譲り受  
 け返咲きの名も戀の辻占に縁ある河内屋こ名乗り萬事粧ひ  
 を新たにし木日より開業致候  
 さて改まる商賣振りは手前味噌の懼り多ければ殊更吹聴致  
 さず一度御達びの上の御試に任せ候も從來の三國なる料  
 理を和洋兩様に改め會席及び一品の御説ゑとすべて御手  
 輕を專一こし又球突塲及風呂等も設備を新にし御隨意御召  
 に供し色も香もある粹の所を御賞賛に預り度存候向卒從來  
 の御愛顧に彌増し永く御引立に預り度希上候  
 十二月十五日  
 京城大和町一丁目  
 元韓洋亭跡  
 河内家  
 電話六三九番











精實を曾とし大勉強仕候也  
宮内府御用  
古金美術書畫表装  
金銀屏風襖洋式天井張  
書町二丁目